

トマス・モア「ピコ・デラ・ミランドラ伝」について

渡 辺 淑 子

On The Life of John Picus by Sir Thomas More

Yoshiko Watanabe

(1)

トマス・モアの作品の中に、「ピコ・デラ・ミランドラ伝」の翻訳があることは、必ずしもよく知られていることではないが、この作品は、モアにとって象徴的な作品である。モアが初めて英文で著したという意味でも、またモア自身の生涯の上でも、一つの大きな転機をなした作品であるということができよう。ここでは、「ピコ・デラ・ミランドラ伝」について、いくつかの面から分析を試みたい。

モアが「ピコ・デラ・ミランドラ伝」の翻訳を試みた時期は、モア20歳代の後半、1500年代の初め頃と考えられる。すでに法律家としてロンドンでの活躍が始まっている一方、勉学と修道に励む、精神的には烈しい緊張の時期であった。グロオシン(Grocyn)、リナカー(Linacre)、コレット(Colet)、リリー(Lily)ら、師であり友であるヒューマニスト達との交りも続いている。学問研究の対象は、キリスト教会の教父達の著作、ギリシャ、ローマの古典、と広範囲にわたるものであった。数年間、ロンドンのシャルトルーズ修道院(the charterhouse)で、誓を立てずにはあるが、修道の生活を送ったともいわれている。1504年には下院議員となり、ヘンリー七世の課税要求に断乎反対して、王の怒りを買うと同時にロンドン市民の支持を得ている。やがて結婚生活に入る。

グロオシンもコレットも聖職者であり、聖職は、いわばイギリスのヒューマニズムの母胎であった。モアはヒューマニストとして学問研究を続けるために聖職につくべきか、あるいはすでに実力を発揮しはじめている弁護士、議員としての実際的な仕事を生涯続けるべきか、聖俗いずれをとるべきかの葛藤に悩んだ。煩悶の末、モアが選んだのは俗人として生きること、しかも信仰と学問と法律とのすべてに生きることであった。十六世紀のモアの伝記作者スティブルトンが述べている。モアは「自分の生活の範とすることのできるような誰か卓越した俗人を、自分の眼の前に手本としておこうときめた。当時、国の内外を問わず、学識と敬虔の誉れ高い人々をすべて思い浮かべてみた。そして結局、ミランドラの伯爵、ジョヴァンニ・ピコにきめた。ピコはその博学な知識をもってヨーロッパ

中に最もその名が知られていたばかりでなく、その生涯の高潔さによっても尊敬されていた。モアはピコのラテン語で書かれた伝記と書簡を英訳し、それに善き生活を送るための十二の指針を書きたした。モアの目的は、これらを他人に知らせるためというよりは、(勿論そのつもりもあったが、) 自分自身によく親ませるためのものであった。¹⁾

モアが、いつ、どのようにして、ピコの著作集を手にしたかは明らかでない。フィレンツェのプラトン・アカデミーに集るマルシリオ・フィチーノやピコ・デラ・ミランドラの著作によく通じていたコレットの影響を受けて、モアはピコに親しむようになったと考えるのは自然なことである。1504年10月23日付コレット宛のモアの書簡によってもわかるように、精神的危機にあったモアにとって、コレットの与えた思想的影響は大きかった。²⁾ しかしまた、この若いイタリアのヒューマニスト、ピコ・デラ・ミランドラの存在は、モアがオックスフォードで学んだ時にすでに身近なものとして感じられていたに違いない。そのピコの生き方に自らの生きる指針を見出しただけでなく、モアはこの伝記をわかりやすい自国語に翻訳することによって、広く読まれることを望んだのである。自国語で伝記を書く試みは、次に「リチャード三世伝」(*The History of King Richard III*)という形で展開していく。

(2)

モア訳「ピコ伝」は、モアの存命中に、単独で二回出版されている。この点、これに続く作品「リチャード三世伝」の出版の事情と比べて、幸運なことであった。その第一は、四折本 (quarto) で、ジョン・ラステル (John Rastell, c. 1475-1536) によってロンドンで印刷されたものである。二番目の版は、八折本 (octavo) で、ウィンキン・ディ・ウォードにより、ロンドンで出版された。両方とも出版の日付は入っていない。³⁾ ウォードの版はラステルによる版の海賊版で、1510年頃出され、一般にはこの方が普及していたらしい。⁴⁾

モアの死後、ジョン・ラステルの息子ウィリアム (William Rastell, ? 1508-1565) が、メアリ女王の治下1557年四月に、「サー・トマス・モア 著作集」を公にする。モアの英文の著作を集めたもので、「ピコ伝」はその第一頁を飾るものである。因に、この版では第一頁の前に、頁を付けずに、モアの青年時代の詩が四つ、16頁にわたって載せられている。これは二折本 (folio) で、一頁およそ60行が二段組になっている。活字は主としてブラック・レターが用いられている。メアリ女王の勅許によって結成されたばかりのロンドンの書籍出版業組合 (Stationers' Company) の有力メンバーであるリチャード・トテル (Richard Tottel) らによって印刷された。幸いなことにこの貴重な版本は、モア生誕500年後の1978年に複製版が出された。本稿はそれに拠っている。⁵⁾

ウィリアム・ラステルの母エリザベス (Elizabeth, 1482-1528) はモアの妹であるからモアとウィリアム・ラステルは伯父・甥の関係になる。更にウィリアムの妻ウィニフレッド (Winifred) は、モア家と親しいクレメント家のジョン (John Clement) と、モアの養女マーガレット・ギグス (Margaret Giggs, モアの娘マーガレットの乳きょうだいとして実子同様に育てられた) の娘である。こ

のようにモア家とラステル家の関係は深いものであり、モアと同じようにオックスフォードで学び、リンカンズ・インで学んだウィリアムの、伯父モアに対する尊敬もまた、実に深いものであった。伯父の著作の出版が、危険で困難なことになっていった時、ともすれば失われそうになる作品を丹念に収集、保存した彼の努力が、1557年版を最も信頼できるものとして今日に伝えているのである。

モア訳「ピコ伝」のタイトルは、「ミランドラ伯ジョヴァンニ・ピコの伝記 (The life of John Picus Erle of Mirandula)」である。⁶⁾ピコの死後、1496年に、甥のフランチェスコ・ピコの手によって、その著作集がボローニャで出版された。その二年後にヴェニスで出版されたものには、フランチェスコによるピコの伝記が加えられている。モアが英訳したのはこの伝記であると言われている。⁷⁾これまで便宜上、モア訳「ピコ伝」とよんできたが、実はこの作品は単なる翻訳ではない。モアはフランチェスコの書いたピコ伝を自由に省略したり書き加えたりして英訳している。次にモアはピコの書簡の中から特に三つを選び出して英訳している。甥フランチェスコに宛てたもの二通と、イタリアの貴族アンドルウ・コルネウス (Andrew Corneus) に送られたもの一通である。ここでも、それぞれの書簡の英訳の前にモア自身の解説が書き加えられている。伝記、書簡に続いて、ラテン語訳聖書の詩篇 (Psalm, Vulgate 15, Conserva me Domine) にピコが註解を試みたものを訳している。「ピコ伝」の最後の部分は、「ピコの12の規則」をもとにしてモアが韻文に書き直し、また書き加えたものから成っている。「父サー・ジョン・モアの家のタペストリーのためにつくられた詩」⁸⁾や「ヘンリー七世の妃エリザベス追悼の詩」⁹⁾にみられるのと同じジョーサー式の七行連の詩型がここでも用いられている。

「ピコ伝」の構成を、1557年の二折本の頁で表わすなら、伝記 (pp. 1-10)、書簡 (pp.10-17)、聖書註解 (pp. 17-20) (以上は約60行二段組) 韻文 (pp. 21-34) (七行連が一頁に5~6) となる。これら全体を一つの読物として、モアはジョイス・リー (Joyeuce Leigh) に献呈している。その献辞が、作品の序文として最初におかれている。「ピコ伝」全体の理解のためにも、知る限りで最初のモアの英文の書簡であるという点からも重要と考えられるので、次に訳出を試み、検討してみたい。

(3)

「キリストにおいて、最も愛しき^{シスター}修道女、ジョイス・リーへ、トマス・モアは、わが主において、挨拶をお送りします。

愛しき^{シスター}修道女よ、新年の初めにあたって、友達同志が、贈物つまりお年玉を、お互いの愛と友情のしるしとして贈りあい、また、幸せに始ったこの年が、つつがなく続きそして栄ある終りを全うするよう望んでいることを示すのは、現在の、いや古くからの習慣です。しかしこのように習慣的に友人の間で用いられる贈物は、一般にすべて、身体にのみかかわるもの、つまり食べるものとか着るもの、あるいは何か娯楽品のようなものです。これではその友情とはほんの肉体上のものに過ぎず、どうやら身体にだけしか及んでいないというように思われます。しかし、キリスト信徒の愛情と親愛は、肉体的であるよりもむしろ精神的な友情でなければならぬのです。何故なら、すべて信仰厚き人々

は、肉体的であるよりも精神的なのですから。(使徒の言葉にも、キリストわれらに宿り給わば、われらは肉に居らで霊に居らん、とあります。)それ故私は、私の心から愛する^{リスター}修道女よ、この新年を祝って、あなたの御心の中の美しい徳が、幸多く続き、神の御恵によって生まれんことを、心から熱望しているあかしとなるような、そのような贈物をあなたにお贈りします。世の人々のお年玉が、その友人がこの世の幸運に恵まれることを願うしるしであるのに対して、私のは、あなたが神において栄えられんことを望んでいることを示すものです。大作というよりは有益なこれらの作品は、イタリアの貴族、ミランドラ伯爵ジョ・ヴァンニ・ピコという人によってラテン語で書かれたものです。彼の学識と美德については、ここで何も申し上げるには及ばないでしょう。彼の功徳を充分にならって、というよりはむしろ、我々の乏しい力によって細々とですが、これからの彼の全生涯の伝記を読んでいくのですから。この作品は^{リスター}修道女よ、順境においては節度を守り、逆境にあっては忍耐を求め、世間的虚栄を蔑み、天上の至福を希求するにあたって、これ以上有益なものを手にすることは、きっとないと思われるような作品なのです。どうぞこの作品を喜んで受け取っていただきたいのです。それが(たとえ翻訳されたものでありましても)立派な内容の読物として、神に対して節度ある願いと愛をもつ何人をも楽しませ喜ばせることができるものでありますならば。そしてあなた御自身、美德と神への熱い願いをお持ちなのですから、悪徳の非難、美德の推奨、あるいは神の名誉と讚美に、節度をもってふれているものでしたらどんなものでも、喜んで受け取らずにはいられないでありましょう。神があなたを守護したまわんことを。」

ここでは日付は書かれていないが、ロジャーズ編集の「モア書簡集」では、1505年1月1日頃と記されている。¹⁰⁾ 1504年末か1505年初めにモアはジェイン・コルト (Jane Colt) と結婚しているのので、この献辞は結婚間もない頃、あるいは結婚直前に書かれたことになる。「ピコ伝」を捧げるのに最もふさわしい人として、モアは、修道に励む女性ジョイス・リーを選んだ。ジョイスはロンドン市オールドゲイトのクララ会 (the convent of Poor Clares outside the walls of London) の修道女で、彼女の兄エドワード・リー (Edward Lee) は後にヨーク大司教となった人である。皮肉なことに、彼は後にモアとの論争に巻き込まれることになるのだが、兄妹ともに、モアの幼友達であった。¹¹⁾ ジョイス・リーに宛てたこの書簡は、友情こめて優しく書かれたものではあるが、個人的な手紙というより、あくまでも「ピコ伝」の序文としての性格が強いことが読みとれる。

始めに指摘したように、モアの「ピコ伝」は我々が知り得る限りにおいて、モアの最初の英語散文である。翻訳の部分と、この書簡を含めてモア自身の創作になる部分との両方に共通して言えることであるが、その英語は明るく典雅な文体を保っている。語句の反復、並列、あるいは頭韻などの修辞が、かなり豊富にしかし度を過すことなく用いられ、文章に快いリズムを与えている。特に、この書簡体の序文の文体に、(拙い日本語訳では十分に伝え難いが、) そのような特徴が顕著に見られる。

英文によって検討してみよう。“their loue and frendship,” “the loue & amitie of christen folke,” “my tender loue and zeale,” “any meane desire and loue to God,” の例に見られるような、同義語もしくは殆ど同じ意味の語の反復が目立つ。いずれも比較的短い音節の語を重ねることによって、

リズム感を生み出し、適度の強調の効果を上げている。この例で更に注目されるのは、とりわけ選び出したことにもよるが、“loue and,…” “…and loue,” のように“loue”が繰り返されている点である。キリスト信徒の愛と友情によって、この書が献じられていることを主張しているからである。(数をあげての証明はできないが、“love”という語は、おそらくモアの英文著作の中で最も好んで最も多く用いられている語の一つではないかと思われる。)

キリスト信徒の愛と友情は “rather ghostly…then bodily,” “rather spirituall then carnall,” であり、一般の人は友が “worldly fortunate” であることを望むのに対し、私はあなたに “godly prosperous” であってほしいと願う、とモアは述べ、この贈物が心の糧となるような精神的なものであることを強調する。これは対照法による強調である。

最も長い結びの文の中の、次の語句について考えてみよう。

“…neither to thatchieuyng (=the achieving) of temperāce in p̄speritie (=prosperity), nor to the purchasing of paciēce in aduersitie, nor to the dispising of worldly vanitie, nor to the desiring of heavēly felicitie…”

ドイル=ディヴィドソン (Doyle-Davidson) がすでに指摘しているように、¹²⁾ “achieving,” “temperance,” “prosperity” と、“purchasing,” “patience,” “adversity” が、それぞれ三つの強勢のおかれた語で、“prosperity” と “adversity” の対照を示す一対の句を成し、更に続けて同じように、“despising,” “worldly,” “vanity” と、“desiring,” “heavenly,” “felicity” とが、三つの強勢語による対照表現を示している。しかも、前半の一组は、“prosperity” と “purchasing,” “patience,” 後半では “despising” と “desiring” というように、それぞれ p と d の頭韻を用いることによって対句の繋がりを保っている。更に、“prosperity” と “adversity,” “vanity” と “felicity,” の各語は、-ity で終る語で、それらが不快な響を感じさせないくらいのほどよい距離をおいている。ドイル=ディヴィドソンのこのような分析によって明らかなように、モアの修辭的的技巧がここで最も高められている。そのことは単に言葉の技巧上の問題なのではない。「順境においては節度を守り、逆境にあっては忍耐を求め、世間的虚栄を蔑み、天上の至福を希求する」こと、これが「ピコ伝」によって教えられることであり、ピコの教えにならって生きようとするモアの、キリスト信者の指針であることを、モアは強く主張しているのである。

なお、モアが次に著す英文の「リチャード三世伝」の中に、“in aduersitie nothyng abashed, in prosperitie, rather ioyfull then prowde,” という句がある。“in aduersitie,” “in prosperitie” の対照 “aduersitie,” “abashed,” “prosperitie,” “prowde,” の頭韻など、この書簡との類似は面白い。¹³⁾

(4)

「伝記」の初めに、ピコの父祖のすぐれた系譜の説明があるが、モアはこれについては簡単に述べ、人間の尊さは先祖の高貴さによるものではなく、個人の学識と徳によるものであることを主張する一節を書き加えている。モア自身の初期の散文の特徴を示す例として注目される。ここでは

“honour,” “honourable,” “virtue,” “virtuous,” “nobleness,” “noble”等の言葉が繰り返し用いられ、中でも“honour”と“virtue”は著しい。

次にピコの風貌を描写している一節を引用しよう。

He was of feture and shappe semely, and bewteous, of stature goodly and high, of flesh tēdre and soft, his visage louely and faire, his coloure white, entermengled with comely reddes, his eies gray and quicke of loke, his teeth white and euen, his heere yelow and not to piked.

文章表現の完璧な美を追求し続けたウォルター・ペーター (Walter Pater, 1839-94) が、その名著「ルネサンス」中の一編“ピコ・デラ・ミランドラ”の中で、この部分をそっくり引用していることは注目すべきことである。¹⁴⁾ プラトンのラテン語訳を完成したばかりのマルシリオ・フィチーノの書斎をピコが訪れる場面である。「入ってきた青年は、今ちょうど旅から帰ったばかりのような様子で『風采は上品で美しく、身の丈は堂々と高く、肉づきは華奢で柔かく、顔は愛らしく美しく、肌色は白に綺麗な赤味をまじえ、目は灰色ですばしこく、歯は白々と歯ならびよく、髪は黄色く豊かで』当時としては珍しく手を入れて綺麗に刈ってあった。」ペーターはまた、次のようにも述べている。「甥のフランチェスコの書いた彼の伝記は、一種優雅な趣きをもっていて、サー・トマス・モアの手でラテン語原文から翻訳されただけの価値はあったように思われる。モアは、イタリア文化の大愛好者で、数ある著作のなかでも、彼のいわゆる『ミランドラの伯爵、イタリアの偉大なる君主』ピコの伝記は、風変わりな古めかしい英語のまま、今なお読まれて然るべきものであろう。」¹⁵⁾

翻訳ではあるが、上の一文にはモア特有の軽快なリズムが満ちている。まず，“semely and bewteous,” “goodly and high,” “tēdre and soft,” “louely and faire.” “white and euen”のように、形容詞の重複が五組もみられる。また、前半は“He was of feture and shappe…,” “of stature…,” “of flesh…,” 後半は“his visage…,” “his coloure…,” “his eies…,” “his teeth…,” “his heere…,” という型が繰り返される。用いられている語は、平易な、ほとんど日常的な語ばかりで、ピコの外見をわかりやすく、具体的に描き出している。

モアは「リチャード三世伝」の中でも、人物描写に同じ手法を用いている。例えば、エドワード四世を描写して、“He was of visage louelye, of bodye myghtie, strong, and clean made,” リチャード三世については、“…little of stature, ill fetured of limmes…hard faouered of visage…”と述べている。¹⁶⁾

エラスムスがフッテンに送った書簡の中で、モアの人物描写をしている次の一節もヒューマニストの特徴をよく表わしている。

「まずモアについてあなたが一番御存知ないところから始めましょう。骨格、体つきからいって彼は大きくはないが、目立って小さくありません。肢体のどの部分もほんとうに何の文句をいう余地もないほどに均勢がとれています。彼の肌は白く、顔色は青白いというよりも血色のよい方ですが、決して赤味がかってはいません。せいぜいほんのりとした赤味が全体にあらわれているだけです。髪

の毛は黒みがかかったブロンド、あるいはブロンドがかかった黒、ひげはうすく、眼は青味がかかった灰色で、またあちこちに小さい斑点があります。」¹⁷⁾

まず外見をわかりやすく表現し、やがて内面へと進んでいくというやり方、具体的な人間の表現に関心を示すことを忘れないこと、これはルネサンス・ヒューマニストに共通する態度であった。

以上は、モアの「ピコ伝」の一部をとりあげたにすぎない。モアの英語散文の特質を論ずるには、更に詳細な分析が必要であろう。また、最終部分を構成する重要な要素となっている韻文については、ここではふれていない。これについては、モアの初期の他の詩との関連において、別に検討したい。

注

- 1) Thomas Stapleton, *The Life and Illustrious Martyrdom of Sir Thomas More*, in the translation of Philip E. Hallett, ed. by E. E. Reynolds (London: Burns & Oates, 1966), p. 9.
- 2) E. E. Rogers, ed. *The Correspondence of Sir Thomas More* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1947), pp.5-9. E. E. Rogers, ed. *St. Thomas More: Selected Letters* (New Haven and London: Yale Univ. Press, 1961), pp.3-6.
- 3) R. W. Gibson, ed. *St. Thomas More: A Preliminary Bibliography of His Works and of Moreana to the Year 1750* (New Haven and London: Yale Univ. Press, 1961), pp. 89-91.
- 4) E. E. Reynolds, *The Field is Won: The Life and Death of Saint Thomas More* (London: Burns & Oates, 1968), p. 44.
- 5) *The Workes of Sir Thomas More Knyght, sometyme Lorde Chauncellour of England, wrytten by him in the Englysh tonge. 1557. Vol. I* (London: Scolar Press, 1978), Introduction by K. J. Wilson.
なお、W. E. Campbell, ed. *The English Workes of Sir Thomas More*, 2 vols (London, 1927 & 1931)の第一巻にも「ピコ伝」は載せられている。現在刊行中の The Yale Edition of the Complete Works of St. Thomas More では、第一巻に、*English Poems, Life of Pico, Four Last Things* が予定されているが、未刊である。
- 6) 1557年ラステル版では次のように書かれている。
The life of John Picus Erle of Myrandula, a great Lorde of Italy, an excellent connyng man in all sciences, & vertuous of liuing: with diuers epistles & other workes of y^e sayd John Picus, full of greate science, vertue, and wisdom: whose life and woorkes bene worthy and digne to be read, and often to be had in memory. Translated out of latin into Englishe by maister Thomas More.
- 7) E. E. Reynolds: *The Field is Won*, p. 43.
澤田昭夫「ヒューマニズムとキリスト教」(石井正之助、ピーター・ミルワード監修『英国ルネサンスと宗教』荒竹出版、1975年)、p. 53.
- 8) Mayster Thomas More in his youth deuyseyd in hys fathers house in London, a goodly hangyng of fyne paynted clothe, with nyne pageauntes, and verses ouer of euery of those pageauntes: which verses expressed and declared, what the ymages in those pageauntes represented: and also in those pageauntes were paynted, the thynges that the verses ouer them dyd (in effecte) declare, whiche verses here folowe.
- 9) A ruful lamentaciō (written by master Thomas More in his youth) of the deth of quene Elisabeth mother to king Henry the eight, wife to king Henry the seuēth, & eldest daughter to king Edward the fourth, which quene Elisabeth dyed in childbed in february in the yere of our lord 1503 & in the 18 yere of the raigne of king Henry the seuenth.

- 10) E. E. Rogers, ed. *The Correspondence of Sir Thomas More*, p. 9.
- 11) *Ibid.*, p. 9.
澤田. 前掲書, p. 32.
E. E. Reynolds, *The Field is Won*, p. 44.
- 12) W. A. G. Doyle-Davidson, "The Earlier English Workes of Sir Thomas More" (*English Studies*, 17, 1935), rpt. in *Essential Articles for the Study of Thomas More*, ed. by R. S. Sylvester & G. Marc'hadour, (Hamden, Connecticut: Archon, 1977), p. 368.
- 13) The Yale Edition of The Complete Works of St. Thomas More, Volume 2, *The History of King Richard III*, ed. by Richard S. Sylvester, (Yale Univ. Press, 1963), p. 4.
- 14) Walter Pater, *The Renaissance: Studies in Art and Poetry*, The 1893 Text, ed. by Donald L. Hill (Univ. of California Press, 1980), p. 28.
- 15) ウォルター・ペーター著, 別宮貞徳訳『ルネサンス』(富山房, 1977年), p. 45, p. 44.
- 16) The Yale Edition: *The History of King Richard III*, p. 7.
- 17) 澤田昭夫「エラスムスの『モア伝』について」(澤田昭夫, 田村秀夫, p. ミルワード編『トマス・モアとその時代』, 研究社, 1978年) p. 7.

(1983月1月17日受理)